福井の原発を考える②

原発問題住民運動福井県連絡会

事務局長　林　広員

死傷事故～電力会社の公共性

2004年8月9日午後3時すぎ、関西電力美浜発電所3号機で二次系配管が破損し関連会社の作業員11名が死傷するという大事故が発生した。当時私は、敦賀市和久野にある診療所に勤務していたが、福井の病院の職員からの電話で事故を初めて知った。「今ニュースで美浜原発の事故を放送しているぞ。そっちは大丈夫か？」と心配そうな声だった。急いで待合室のテレビを見たが詳細はわからない。ここから美浜原発まで直線距離で 14～15 キロである。

翌日の福井新聞では「蒸気噴出4人死亡　美浜3号　7人重軽傷　運転中、タービン建屋　放射能漏れなし」と一面トップで報じた。「九日午後三時半ごろ、営業運転中の関西電力美浜原発3号機（加圧水型軽水炉、出力八二・六万キロワット）＝美浜町丹生＝で、タービン建屋内の二次系配管が破損して蒸気が漏れる事故が起きた。現場で作業をしていた十一人が蒸気を浴び、四人が死亡、七人が重軽傷を負った。国内の運転中の原発で複数の死者が出るのは初めて。放射能による周辺環境への影響はなかったが、原発史上で過去最悪の事態となった。（中略）

蒸気が噴出したのは三系統ある二次冷却水系の一つ。タービンを通った後、水になった冷却水を温め直して蒸気発生器に送る復水配管で、低圧給水加熱器から脱気器に至る部分。破断した個所はタービン建屋の二階天井付近を通る位置にあった。配管は外径が五十六センチ、厚さ一センチの炭素鋼製。配管内の冷却水は約十気圧で水温は百四十度。 県などの立ち入り検査の結果、破れた配管の一部はめくれて垂れ下がった状態になっていた。配管の厚さは最も薄いところで 0・14 センチになっていた。通常は周囲を覆っている保温材も残っておらず、破損によって圧力の下がった水が蒸気に変わり、一気に噴き出したとみられる。」とある。

事故の原因は配管の内部が腐食などにより薄くすり減り、高い運転圧力により破裂したもの。関西電力の内部規則では、肉厚 0.47 センチになる前に予防措置をとることになっている。しかし 13 年前に配管検査で取り換えるはずが会社の見落としで台帳に登録されず、運転開始以来一度も点検されてこなかったという。規則どおり点検していれば防げた事故だった。「人災」である。

「原子力発電所」は一般の住民に影響のない生活圏から遠い場所で住民ひとりひとりの生活を豊かにする電気を生み出す公共性の強い国の施設だと思っていた私の認識をこの死傷事故は、こなごなに打ち砕いた。関西電力や北陸電力は昔の三公社五現業のような存在だとかってに考えていた。まさか民間企業で株式会社だなんて想像できなかった。だって民間企業で株式会社だったら、電力会社は住民のためでなくて株主の利益のために原発を動かしていることになるではないか。福島第一原発事故後に当時の管直人総理が中部電力の浜岡原発(静岡県)の全炉の運転停止を要請したことがあったが、時の総理大臣でも原発を停めさせる法的拘束力はなく「特段の配慮」を求めた形だった。中部電力では、二度の取締役会を開いて「総理大臣からの要請は極めて重い」として要請を受け入れた。これは原子力政策が国により決定され、その政策方針に従って、民間企業である各電力会社が推進

していったという経緯が複雑にからんでいる。後で知ったが、このようなシステム＝「国策民営」を推進した人は元読売新聞社社主で野球の「読売ジャイアンツ」の生みの親、正力松太郎氏だったという。

ともかく美浜原発の事故をきっかけに「原発」を考えるようになっていった。「どうして若狭に原発が多いんだろう？」「原発は安全なのだろうか？」「事故がおこっても反対する人はいなかったのだろうか？」・・・・本で学ぶだけでなく『「原発」についてどう思いますか？』と勇気を出して和久野の診療所の近くに住んでいる人に聞いてみた。帰ってきたのは「反対派の人は『げんぱつ』と言いますけれど、地元のものは親しみを込めて『げんでん』さんと呼んでいます」という言葉だった。しかしその言葉の行間には地元の人しか感じない実利が隠されていた・・・・・。